

ティラノサウルスとの逢瀬を通じて感じたことあれこれ

蓮見

母が最初に地球を滅ぼしたのは、確か私が七歳の頃だったと思う。くたびれたぬいぐるみのだん吉を抱え、ふるえることしかできない私をちらりと見やり、母はただ「キキキルユウウ」と紫色の粘液を吐き散らしながらつぶやいていた。なにか「キキキルユウウ」なのか。お前が地球を滅ぼしたせいで一週間前から楽しみにしていたアニメが見られなくなったじゃないか。そう糾弾する間すら与えられず、私は時代ごと吹き飛ばされた。最初に目に入ったのは恐竜である。ティラノサウルスと名乗った彼を、私はサノバビッチと呼ぶことにした。彼は大人しい種族ではなかったのだ、ぶちまけられたホットケーキを見るやいなや、私の片足を筆り取った。切断こそが至上の快楽である。雲が真っ黒にたちこめていた嵐の日、だん吉がこっそりそうだと教えてくれた。彼女は何でも知っている。赤いスポーツカーに乗っている男は皆、墮胎の名人であるということ、それがゆえに三十五歳まで生きられないということ。墮

胎のやり方くらい、七歳児でも知っている。猫草を使うのだ。猫がオエツと吐くのと同じく簡単に墮胎することができる。「おう、サノバビッチよ」恐竜は振り向き、もう片方残っていた足を手羽先のように筆る。宇宙を見上げれば羽根を生やした母が舞っていた。酸素パワーを受けなくても、母は飛べる。つまり、重力から解放されているのだ。そのとき無謀にも零戦が突っこんでいった。無駄だ。だん吉が笑っている。猫草を持ってこれみよがしにパイロットに振っている。「サノバビッチ」恐竜が私の腸を食っている。もつと食え。食って腹を壊せ。生肉は体に悪い。愚者は失禁して恥をかけばいい。あの石田三成でさえ切腹のときまで自らを氣遣っていたではないか。私の腸は緑色をしていた。学校で飼っていたゴミ虫の色と同じだった。ゴミ虫には足がなかった。全て私が食わされたのだ。あの教師は私にロゴスとパトスとエロスを教えるかわりに、貞操を要求した。それがテーゼであった。そのうち私は生ゴミのように焼却炉に捨てられた。ゴミ虫もつづいた。私は全ての汚物を妻とする。結婚する。永遠の愛を誓う。たとえ砂漠でオアシスを見つけたとしても、けっして他言するこ

となく自分一人で貪り喰らうだろう。それが私の私である証明なのだから。ありふれた心の闇に存在意義など、そもそも名前など要らない。私の妻はお前だ。弾力のある内臓に指がふれている。少しでも力を入れれば、母同様紫色の粘液を吐き、墓に祀られることになる。祀りとは踊りである。踊りとは犯すことである。私たちは踊りつづける。それがうつくしい飛躍となるまで。シャツの端を掴んでももう恋人は帰らない。権利とは何か。ぶちまけられたホットケーキにもあつたはずだ。この世界はすでに犯されてしまっている。もはや完璧な弧を描くことはないだろう。サノバピッチよ、お前のせいだ。お前の責任だ。彼は私の体をほぼ半分近く食べ尽くしてしまっていた。ぎよろりとした黄色の腫をしている。昨日縊り殺された隣家の中年男性と同じだった。お前が私の嫁なのか。人類の汚物なのか。サノバピッチは答えない。ただ静かに恨み言をつぶやいている。面倒だ。私は上半身だけでサノバピッチを殺した。テイラノサウルスの死体からは白い花が生えてきた。乙女ジャンヌの墓にも同じ花が咲いていることだろう。学校の教師は私の貞操を奪ったが、未来までは奪わなかった。しか

し彼が何と言っていたのかは、今となっては思い出せない。ただ私が言えるのは人類が青い星を見つけられるだろうかということだけだ。時計は猛烈な勢いで逆回転をしている。そろそろムスク薫る舞踏会の時間だ。お姫様は真夜中には帰らねばならない。私は姫を三人殺したことがある。一人は塔から突き落とし、一人は閉鎖病棟で狂い死に、最後の一人は毒入りスープで一緒に逝った。宇宙を駆けるパイロットからの交信はすでに途切れてしまっている。街には夜鷹がひしめき、白粉の匂いが充満している。さんまの刺身パックにはかつて娶ったゴミ虫が這っていた。たまらず叩き潰す。さんざめく潮の中、私は一人、天に向かって唾を吐いた。重力に従い落ちてきた雨が返事だ。「否」なげだ。誰かが嘲笑っている。誰を。私を。「だから」だん吉が叫んでいる。「答えは風のなかにあるの」そうか、これは前世からの宿命であったのか。「キキキルユウウ」原始、母は太陽だった。「キキキル」だから母は、遅かれ早かれ地球を飲みこまねばならなかった。「キキキ」全ては、自然の帰結であったのだ。「キキキルユウウ」「キキキルユウウ」そう、全ては、キキキルユウウ。キキキルユウウ。